

---

# 闇を切り裂く黒白の魔導士

夕闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇を切り裂く黒白の魔導士

### 【Nコード】

N7970P

### 【作者名】

夕闇

### 【あらすじ】

少年は幼い頃から知ってしまった

人間が汚いことを

人間の黒い部分を

少年はずっと見てきた

自分の欲のためなら手を汚すことすら厭わない人間を

そして少年は青年となった

青年は孤独に生きていた

だけど、そんな彼に仲間ができた

自分を変えてくれる仲間に

だから青年は戦う

仲間を守るために

これはそんな青年の物語

## プロフィール

・プロフィール

名前：タクト・インフィニティ

年齢：19歳

外見：闇を思わす漆黒の黒髪に透き通った紫の瞳、黒い羽織りに常に手袋を着けている。

フェアリーテイルのマークは左手の手のひらにある。両手首にはブレスレット、両足にはレッグバンドを着けており、これは装着者の魔力を抑える役割をする。

ルックス：上の中（グレイやロキが上の下）

魔法：バランディン聖騎士

主に武器を換装して戦う魔法剣士

精霊魔法も使える

普通魔法も使えるがあまり使わない武器一覧：天道十二振りと呼ばれる刀

無双刀・刹那（無）

紅羽刀・朱雀（火）

蒼龍刀・青竜（水）

氷牙刀・白虎（氷）

雷神刀・麒麟（雷）

森羅刀・玄武（自然）

風神刀・疾風（風）

虚無刀・黒兎（滅）

神喰刀・黒渦（吸）

幻魔刀・夢幻（幻）

退魔刀・白鷺（祓）

封龍刀・須佐之尾（封）

精霊一覧

黒猫座・二ヶ（女）  
狼座・ジン（男）  
麒麟座・ユピテル（女）  
鳳凰座・フレイヤ（女）  
鷲座・ホルス（男）  
まだまだ増える予定

タクトの右手にはある秘密がある。  
タクトは体を改造されており、右手に埋め込まれた結晶の力を開放して戦うことも出来る（ディーグレの神の道化を想像してくれれば間違いないです）

改造された影響で身体能力も高く魔力量もエーテリオンの三分の二もある。

お知らせ

この物語では主人公を新人としてギルドに入りたいので原作のガルナ島の後辺りから始まります

11/07/11

加筆修正

## プロローグ：始まりの誕生

マグノリアの東の外れにある人体実験所で今日も悲惨な実験が行われていた

しかし、今日はいつもと少し様子が違った

「グワアアアア………ガクツ」

男1

「ちっ！失敗だこいつはもう使い物にならねえ……処分しておけ」

男2

「わかりました」

男1

「おい次の実験体を持って来い」

男2

「…連れてきました」

男1

「おっ！こいつは育ててきた成功体の中で一番出来が良いやつじゃねえか」

『くそっ放しやがれ！』

男1

「ふっ元気があって何よりだ……じゃあさっそく始めるか」

タクトの下に魔方陣が現れ輝き始める

男1

「ふっははは……成功だ！これでこいつの魔力量も倍以上に膨れ上がったぞ！！」

『ぐっ……うう……があああああああああ！！』

男1

「くっ！何だこの魔力量は！！異常すぎる！！……チツ早く抑え込め！！」

男2

「こ、こいつ……ぐわああ！！」

男3

「うわああああ！や、やめてくれえ、助け……」

男1

「わ、悪かったよ、俺が悪かった。これ以上何もしないから命だけは……」

……グシヤ……

『許さねえ……体を改造した科学者もこの組織の奴等もこんな組織を作った政府の奴等も……俺は絶対に許さねえ』

『だが、まずこの施設から出るのが先決だな』

タツタツタツ

タクトは走った

今までこの施設で人体実験されていた数年間で逃げ道は覚えていた

一直線の通路を走っている途中不意に声が聞こえた気がした

『?…気のせいか?』

???

「(タクト…タクト…)」

何処からかタクトを呼ぶ声が頭の中に直接聞えてくる

『?!誰だ俺を呼ぶ奴は!?!』

???

「(こつちよ…ここにいるわタクト)」

『この部屋か……よし!』

カチャ…キィー……

タクトは警戒しながらも扉を開けた

するとそこには綺麗な女性が宙に浮いていた

『誰だお前は…何故俺の名前を知っている』

???

「私はここに並んでいる刀達の番人…まあ守護精霊みたいなものね。それで私はこの刀達の主となれる者を探していたの。そして貴方には不思議な力を感じたわ。だから、ずっと貴方のことを見ていたの。貴方がこの施設に入れられた時からずっとね」

何者だあいつは…少し透けてるところを見ると人間ではなさそうだが……それに今あいつが言っていたことは気になるな

『俺のことをずっと見ていただと……じゃあ何故今まで俺のことを助けてくれなかったんだ。どんな酷い実験をされてたかお前だって知ってるだろ!!』

精霊

「ごめんなさい…私には刀を守ることと刀の主を導くことしか出来ないの」

『チツまあいい……それで…何故俺をここに呼んだんだ?』

精霊

「それは貴方にこの刀達のなってもらいたいからよ」

『!?!?……何故俺なんだ?』

精霊

「それはタクトには扱えるだけの力量と器があるからよ。そしてもう一つ…このままでは貴方が修羅の道に墜ちてしまうからよ」

『…………どうゆうことだ』

精霊

「タクト…あなた今人間のことをとても恨んでいるでしょう」

『ああ恨んでいるさ…この組織の奴等も組織を作った政府の奴等も俺が全員殺して殺るよ!』

精霊

「確かにタクトを改造した人達のことを許すことは出来ないわ。でも、貴方は今から外に出るのしょう…そこにはタクトが思うような悪い人達ばかりではありません。

きっとタクトの運命を変えてくれる人だっています。

だからそれまでに貴方が道を踏み外さないためにもこの刀達が必要なのです!」

『ククク…ハハハ…面白い!俺のことを変えてくれる人が現れるだつて?親にも捨てられた俺にか!』

だが、まあこの刀達を俺の武器にしても損はないだろう

『よし、いいだろう。俺がこいつらの主になってやろう。俺を変えてくれる人が現れる話も期待せずに待ってやる。だが、復讐のこと

は忘れない…それでもいいのか？」

精霊

「はい、構いません。私が導いた人だから間違えはありませんわ…  
そんなことがあっても貴方を信じます」

『そうか……では、刀の守護精霊よこの刀達は俺が有り難く頂戴し  
ていく』

精霊

「はい、大切に使ってあげて下さいね（ニコッ）」

『フフ…これで少しは面白くなってきたな。さあて外の世界はどんな感じかな』

こうして後に最強の魔道剣士と恐れられる魔導士が誕生したのであった

## プロローグ：始まりの誕生（後書き）

この小説を読んでくださってる方々初めまして夕闇です

文才ありませんし僕の力で何処まで行けるか分かりませんがよかつたら温く見守りながら読んで下さい

## 第一魔法：新たな出会いまでの道のり

ナツ

「くそ〜なんでオレがこんな仕事しなきゃいけないだー!!……うぷ」

グレイ

「こんなことになったのも元はナツが一人でS級クエスト行こうとしたのが原因だろ」

ナツ

「なんだよグレイだって止めに来たくせに一番戦ってたじゃねーか……うぷ」

グレイ

「気持ち悪いんだっいたら喋るんじゃねーよ」

エルザ

「やめないか！今回の責任は私にある。マスターに止めて来いと言われたのに二人を止めきれなかった私の失態だ」

ルーシー

「まあまあエルザもそこまで責任感することないよ」

ハッピー

「あい、今回もナツとグレイが暴走したのが原因だよね」

ナツ達一行はガルナ島に勝手に行った罰として電車に数時間乗った

後ヘルゲートという町に向かって歩いてた

ルーシィ

「うわ〜聞くからに怖そうな名前ね」

エルザ

「今回の依頼は評議院から直々にきたモノだ。なんでも周りの闇ギルドがどんどん潰されているらしい。それに他のギルドからも何人も魔導士を派遣しているが全て返り討ちにあってるそうだ」

グレイ

「ちよつと待てよ…何でそれで魔導士が派遣されんだよ。潰されてるのは闇ギルドだから別にいいじゃねえか」

エルザ

「闇ギルドとはいえ正体不明の敵にギルドが幾つも潰されているんだ。評議院としても民のために調査しなければいけないと思っただろう」

ナツ

「ガアー！難しい話はわかんね！けど、とりあえず強いやつと戦えるってことだろー！」

ルーシィ

「ナツ……あんた話聞いてた？みんな返り討ちにあってるのよー！」

ハッピー

「あい、ナツはバカだからしょうがないよ」

そしてナツ達一行はヘルゲートに到着した

ワイワイガヤガヤ

ルーシイ

「ヘルゲートって言うからもつと恐ろしい所かと思っただけど結構普通に賑わってるわね」

エルザ

「そうだな…とりあえず町の人から情報を集めるのが先決だな。私達はこの“白い悪魔”と呼ばれる者について何も知らないからな」

ルーシイ

「そうね。町の人に聞いて回しましょう」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

町人1

「すまない、私は知らないな」

ルーシイ

「そうですか……協力有り難うございました」

町人1

「役に立てなくて悪いね」

ルーシイ

「ふうふう、情報集まりませんね……今で何人目だったかな？」

ハッピー

「あい、もう10人以上は聞いたよ」

エルザ

「このままでは無駄に時間が過ぎてただけだな……そうか！もし  
かしたら質問の仕方が悪かったのかもしれない」

ルーシイ

「？…何か悪いとこなんてあったかな？」

エルザ

「考えてもみる…この町はとても平和で結構賑わってる。そんな所  
で白い悪魔なんて物騒な名前なんて聞かないかもしれない」

グレイ

「そうかも知れねえけどよ……それ以外情報がないのにどうすんだ

よエルザ  
「

エルザ

「任せろ……私に考えがある」

・  
・  
・  
・  
・  
・

エルザ

「すまない、この辺りで白い悪魔という名前を聞いたことはないか？  
もしくは最近変わったことはなかったか？」

町人2

「白い悪魔？……悪いが聞いたことないな。でも、まあ変わったこととはあった言えばあったかな」

エルザ

「！……そのことついて教えてくれないか？」

町人2

「いいけど……まあ最近と言っても一年ぐらい前の話なんだけど、

前はこの辺りに闇ギルドの連中がのさばっててすごく治安が悪かったんだよ」

ルーシィ

「ウソー?!こんなに町も発展してて治安も良さそうなのに」

町人2

「今はここまで復興してるけど前は本当に酷かったものだよ。でも、一年くらい前から急に連中の数が減ってきて一カ月くらいで町の外に出てもほとんど見ないくらい減ったんだ」

グレイ

「この辺りは闇ギルドが特に多いことで有名だぜ……なのにそれをたった一カ月で全滅させたって言うのか!」

エルザ

「まあ待てグレイ。まだ話は終わってない……すまない、続きを頼む」

町人2

「ああ…もう一つ変わったことと言えばこの辺りに他から人が移り住んでくるなんてまず無かったのに、連中が減り始める少し前に一人移り住んできた奴がいるんだよ」エルザ

「?!……その者が何処に居るか知ってるか!」

町人2

「ああ、確かあの山の中に住んでるって噂だよ」

エルザ

「そうか…いろいろ助かった。協力感謝する」

町人2

「どういたしまして」

グレイ

「おいエルザ、そいつが住んでる場所なんて聞いてどうするつもりだよ」

エルザ

「たぶんその移り住んできた奴が白い悪魔とやらだろう。もし違っていても何か情報を持つてる筈だ。会いに行つて損はないだろう」

ルーシイ

「まあエルザがそう言うなら私は構わないけど」

エルザ

「よし、では行くぞ」

こうしてナツ達は謎の移り住んできた者に会うために山へと登って行った

~~~~~

その頃主人公ことタクトは運命の出会いとなるナツ達に向かって来ているとも知らずに呑気に読書に耽っていた

なんか最近やけに正規ギルドの魔導士達に狙われるな  
人のことを悪者やら噂になってる白い悪魔やらと決め付けていきな  
り攻撃したりしやがって

『（まあ…実際噂になってる白い悪魔は俺のことなんだけどな）』

だけど、証拠も無いのに決め付けるのは良くないよな

『さて、次はどんな奴が来るかな』

タクトは次なる来訪者に胸を躍らせながら手に持っている本に視線  
を落とし読むのに集中し始めた

**第一魔法：新たな出会いまでの道のり（後書き）**

やっと一話書けた

やっぱり学業と両立させるのは大変ですね

次はもっと早く出来るように頑張ります

## 第二魔法：運命の人達との出会い（前書き）

突然だが、今日も来客が来た。

だけど、今日はいつもと少し違ったな

何故かって？

それはいきなり襲ってこなかったからだ。まあ普通は襲ってこないものだけど俺結構噂になってるみたいだからな

まあ俺が説明するよりも実際見てくれた方が早いな

と言っことどうぞ

## 第二魔法：運命の人達との出会い

ナツ達は30分ほど山を歩き、町で聞いた人が住んでいるであろう洞穴の前まで来た

グレイ

「ふう〜、やっと着いたか。危険な山と言ってたけど道がいりくんでるだけで特にモンスターも出なかつたな」

今登っている山はモンスターが凶暴なことで有名な山だった

エルザ

「無事に着くことに越したことはないのだから良いではないか」

ナツ

「よし！じゃあさっそく乗りこもーぜ！」

ナツは今にも走り出しそうな勢いで意気込む

グレイ

「なんであいつあんなケンカ腰なんだよ」

ルーシィ

「ちよっとナツ！今回は戦いに行くわけじゃないのよ」

ルーシィが止めようとするもナツの勢いは止まらない

ナツ

「うるせー！オレが一番乗りだー！！」

ゴン！…シユ…

ナツの頭に重い一撃が落ちた

エルザ

「早まるなナツ。今回はただ白い悪魔について聞きに来ただけだ」

ナツ

「……………」

ナツは返事がない……ただの屍のようだ

ハッピー

「あい、もうナツ気絶してるよ」

どうやらエルザの一撃でナツは意識を刈り取られたようだ

エルザ

「しょうがない、ナツは私が連れていこう。ルーシイ後は頼むぞ」

グレイ

「エルザが気絶させたんじゃないかよ」

ルーシイ

「確かにね……まあいいわ行きましょ」

~~~~~

ルーシイ

「ここにちはー、誰か居ませんか？」

？……また誰か来たみたいだな。どうせまた正規ギルドの奴等だろうから無視してもいいが……何故か今日はいつもと違う気がする……何か会わなくてはいけないような……  
まあいい、とりあえず会ってみればわかるか

『……どうしたこんな山奥まで来て……何の用事だ？』

タクトは突然訪ねてきた来訪者に聞いた

ルーシィ

「あっこんにちは…えっとー…用事ってほどでもないんだけど…ちよっと白い悪魔について聞きたくて」

白い悪魔……やっぱりこいつらも他の奴等と同じだったか

タクトは少し身構えていつでも戦えるように体勢を整えた

エルザ

「別にそんな構えなくてもいい……私達はただ白い悪魔について聞きに来ただけだ」

エルザは不審がられていると思い安心させるように言った

『……そうか…生憎だが俺は白い悪魔について何も知らないな』

タクトは少し考えた後構えを解き答えた

エルザ

「…そうか。協力感謝する。いきなり押しかけて悪かったな…みんな戻るぞ」

エルザは軽く礼をしてナツを引き摺りながら道に戻っていった

グレイ

「おい、ちょっと待てよエルザ。もっとあいつにいろいろ聞かなくてよかったのかよ」

いきなり立ち去るエルザに慌ててグレイ達は追いかけて行って聞いた

エルザ

「あれで充分だ……たぶん彼が白い悪魔の正体だろう」

エルザはタクトから充分離れたのを確認した後答えた

ルーシィ

「ええー！そうなの？！だったらさっき捕まえればよかったのに」

エルザの言葉にルーシィだけでなくグレイやハッピーも驚いた顔をしていた

エルザ

「彼は白い悪魔と聞くとすぐに戦闘態勢に入っていた。あの反応は

今まで白い悪魔について聞かれたか身に覚えがあるからだろう」

グレイ

「だったら尚更さつき捕まえればよかつたじゃねーか」

グレイはまだわからないように言った

エルザ

「そんなことをしたら今まで調査しに来た人達と同じ道を辿ってしまふ。推測だが今までの人は彼を白い悪魔と決め付けて捕まえようとしたのだろう…だから返り討ちに遭った」

グレイ

「じゃあどうすんだよ」

エルザ

「現場を押さえて正体を直接確認するんだ。白い悪魔は夜に行動するらしいから…その時を狙えばいい」

ルーシィ

「すごい。さすがエルザ！そこまで考えてるなんて」

ルーシィはエルザの案に感嘆しながら言った

エルザ

「たいしたことではない…とりあえず町まで戻るぞ」

エルザに言われナツ達は（ナツは未だに引き摺られながら）山を下りていった

しくった…下手に警戒したせいでバレたな  
少なくともあの紅髪のロングヘアは気付いただろうな

『チツ…まあいいかどうせ近いうちにバレただろうしな』

タクトは不敵に笑いながら洞穴に戻っていった

『（夜が………楽しみだな）』

~~~~~

夜

ナツ達は町に戻り一旦宿をとった後町を見渡せる高い場所に来ていた

ルーシイ

「ちよつとエルザくなんでこんな所で待つのよ」

ルーシイはここに来てから数分で愚痴り始めた

エルザ

「ここなら町全体が見渡せる…奴が動けばすぐに見つけられるからな」

ルーシイの問いに平然と答える

ナツ

「今度はぶっ飛ばしてもいいんだよな！な！」

グレイ

「別にいいけどほどほどにしとけよ」

グレイは止めるのも面倒いのか適当に受け流す

強い風が吹く中更に1時間ほど待っていた

ルーシィ

「うう〜〜寒い〜〜」

ハッピー

「ルーシィ…そんな薄い格好してるからだよ」

ルーシィ

「ハッピーなんて服すら着てないじゃない」

ハッピー

「ぶぷっ、服着てる猫なんているわけないじゃん」

ルーシィ

「知ってるわよ！私が言いたいのには服着てないのになんで寒くないかってことよ」

ハッピー

「?……………だつて猫だし」

ルーシィ

「理由になつてないし！（。。）」

ルーシィとハッピーが二人でコントをやっているとエルザの声が響く

エルザ

「静かに！……来たぞ」

皆がエルザのしている先を見ると白い物体が屋根の上を飛び跳ねて町の外に向かっていた

エルザ

「行くぞ！」

掛け声と共にエルザは屋根の上を跳んで追いかける  
ナツはハッピーに持ってもらって飛んで追いかける  
グレイは氷でスロープを造り滑って追いかける  
ルーシィはおろおろしている

ルーシィ

「えっえっ…ちょっと皆待ってよ〜」

三人と一匹は全力で追いかけるがなかなか距離が縮まらない

エルザ

「クッ速いな」

ハッピー

「ナツ〜これ以上スピード出ないよ〜」

ナツ

「もうちょっと頑張れハッピー」

グレイ

「ダメだ、あいつ速過ぎるぜ」

ナツ達は苦渋に顔をしかめながらも諦めて一つの屋根の上に下りた

ナツ

「だああああ、ハッピーが駄目ならオレ一人でも行ってやる！」

エルザ

「やめるナツ。ルーシイも追いかけてきてないし一回元の場所に戻るう。そこで作戦を練り直すぞ」

エルザはナツが一人で行こうとするのを止めて元いた場所に戻っていった

~~~~~

ナツ達は一度ルーシイの元に戻り作戦を練り直した結果、白い悪魔が戻って来るのを待ち、再び見つけた後はアジトまで追いかけて乗り込む作戦にした

ナツ

「よっしゃああ、次こそ戦えるんだな！」

ナツは先程敵に逃げられている分更に意気込んでいる

グレイ

「お前今日そればっかだな」

そんなナツを見てグレイは呆れていた

エルザ

「ハッピー、次はルーシイのこと頼んだぞ」

ハッピー

「あい、ルーシイはダメダメだからね。オイラが手を貸してあげないとダメなんだよね」

ハッピーが「ぶぶっ」と笑いながら答えた

ルーシー

「クツ…悪かったわねあなた達みたいにピョンピョン跳べなくて」

ルーシーは嫌味ったらしく言うもハッピーには堪えていないようだ

白い悪魔に逃げられてから30分くらい談笑しながら待っていると

グレイ

「おい皆！奴が来たぞ！！」

グレイが白い悪魔を発見した

ナツ

「よっしゃ次は逃がさねーぞ」

エルザ

「よし、では皆行くぞ」

エルザの合図と共にナツ達は白い悪魔を見失わないように追いかけた

~~~~~

タクトが闇ギルドを一つ潰し家に帰ろうとしていると何か視線を感じた

『(?!……誰かに追われているのか?)』

タクトが周りを見回してみると後ろの方に人影を見つけた

『?!……ああ、昼間の奴等か』

やっと来たか

そろそろ来る頃だと思ったけど意外と慎重な奴等だな

タクトは跳ぶスピードを落としナツ達を誘うようにして家に帰った

タクトは家に着き白い悪魔と呼ばれる状態を解いて少し待っている  
とすぐにナツ達が来た

『……こんばんは。 昼間も来たけど今度は何の用事だ?』

タクトは何も知らないふうに見えた

グレイ

「しらばっくれんな! さっきこの辺りに白い悪魔と呼ばれる奴が下  
りた。 けどどこに居るのはお前しかいない……つまりどういふこと  
か分かるよな」

グレイは核心を突くように言う

『俺が白い悪魔の正体とでも言いたいのか?』

グレイ

「そう言っただよ!」

グレイは苛立ちを隠しきれず答える

『その通り、俺が白い悪魔と呼ばれる者の正体だ。それで俺をどうする気だ？』

ふっ……とタクトは少し笑った後言った

グレイ

「俺達と一緒に来てもらいたい」

グレイは警戒しながらも手を差し伸べながら言った

『嫌だと言ったら？』

タクトは答えがわかってるかのように尋ねた

グレイ

「カづくで……連れてくだけだ！行くぞナツ！」

グレイも答えがわかってたのか手を引っ込めすぐに戦闘態勢に入る

ナツ

「よっしゃーやっと戦えるぜー！」

ナツは待ってましたとばかりに答えた

グレイの一言によって月が照らす中タクトとナツ達の戦いが始まる

## 第二魔法：運命の人達との出会い（後書き）

前の話は地文が少なかったので今回は意識して書いてみました

あと次はちょっとバトルシーンがあります

あまり自信はありませんが頑張ります

### 第三魔法：新たな仲間

グレイ

「行くぞナツ」

ナツ

「よっしやー！」

月や星が煌めき、光を遮る雲一つなく澄み渡る闇夜の中、戦いが今始まる

戦いが始まりグレイが最初に動いた

グレイ

「くられ、氷欠泉　アイスゲイザー」

グレイが両手を地面に当てると氷の柱が次々と現れタクトに襲いかかっていく

タクトはその攻撃を右に跳んで避ける

グレイ

「逃がさねえぜ、アイスメイク……」

グレイが畳み掛けて攻撃しようとした時

『遅い』

地面に足がついた瞬間タクトは一瞬でグレイの後ろに回り込んだ

グレイ

「なにつ……！」

グレイは振り返る間もなくタクトの右回し蹴りで吹っ飛ばされ岩壁

に激突する

『…まず一人』

ナツ

「次はオレだ！…火竜の鉄拳！火竜の鉤爪！！火竜の翼撃！！！」

ナツは突き、蹴り、ラリアットとどんどん攻撃をくり出す  
しかし、タクトは全てを見切り攻撃を避けていく

ナツ

「クソッ、当たらねえ…じゃあこれでどうだ！」

ナツは少し後ろに下がると大きく息を吸い込んだ

ナツ

「火竜の…咆哮！！！」

ナツの口から炎の塊が飛び出しタクトに襲いかかる

ナツ

「やった！」

タクトに炎がモロに直撃したのを見てナツは決まったと思った  
しかしその時、炎が揺れたと思うと炎が真つ二つに割れ、中からタ  
クトが手に何も持っていないのに炎を斬った後の体勢のまま現れた

『つたく、熱いじゃねーかよ』

ナツ

「なっ！！」

ナツは動揺した

だが、ナツの動揺はタクトに服を焦がすほどのダメージしか与えら  
れなかったことや炎を斬ったにも拘わらず何も持っていないことから  
きた疑問でもなかった

ただMAXパワーで放った攻撃の直撃を受けたにも拘わらず何事も  
なかったように立っている……自分では太刀打ち出来ない敵に出会  
ったことへの恐怖心だった

ナツ

「ッ……、ちつくしょー！」

ナツは恐怖心を払拭するかのようにつまむ

ナツ

「火竜の鉄拳！」

『おっと』

タクトはバク転の要領で後ろに体を反らしながら避け、離れ際にナツの顎に一発蹴りをいれた

ナツ

「ぐっ!？」

ナツは予期せぬ所からの攻撃により体がよろけた

『隙あり!』

タクトは着地と同時に一步踏み込みナツの鳩尾に右拳をいれた

ナツ

「しぶっ!…」

ドゴン……………ドカーン

殴られた時の鈍い音の後、岩に衝突する音が辺りに響いた

ルーシィ

「…強過ぎる。あのナツとグレイがたった三発で倒されるなんて」

後ろで戦いを見ていたルーシィはタクトのあまりの強さに口元を押さえ驚く

『二人目』

タクトはナツを殴り飛ばした後エルザの方に振り返った

『次はお前だな』

エルザ

「クツ！換装 天輪の鎧」

エルザはタクトの視線が自分の方を向くと同時に天輪の鎧を身に纏う

『へー、お前は剣を使うのか。じゃあ俺も…換装 無双刀刹那』

タクトの右手に刹那が現れる

エルザ

「！…ナツの炎を斬ったのはその剣か？」

エルザはさっきの戦いを思い返し訊いた

『ナツ？……ああ、さっきの奴か……そうだよ、まあ正確には剣と言  
うより刀だけだな』

タクトは刀を見つめながら答えた  
そして不意にエルザに尋ねた

『…なあお前知ってるか？……』

~~~~~

『…まあ正確には剣と言うより刀だけだな』

エルザ

「（……刀）」

エルザは焦っていた  
ナツとグレイが簡単にあしらった相手だ、下手に動いたらやられかねない  
さっきの質問もただの時間稼ぎにすぎなかった

エルザ

「(どうする…ここは一旦引くべきか)」

だが、彼が素直に逃がしてくれるかどうか…

エルザがどうするべきか考えていると突然タクトに尋ねられた

『なあお前知ってるか?…一流の剣士同士になると剣を交えるだけで相手の実力や心の声まで聞こえるらしい』

エルザ

「？」

私も剣士の端くれだから聞いたことはあるが…

『その立ち姿でわかる。お前はかなりの実力者だろう』

タクトは刀に向けていた視線をこちらに向けてくる

『俺は今までお前ほどの剣士に会ったことがない。だから今俺はその噂を確かめてみたい』

そう言うとタクトはいきなり仕掛けてきた

エルザは何故今そんなことを気にするのかわからなかったがタクトが目の前まで迫っていたので考えるのを止めて、タクトの攻撃を防ぐことに集中した

キン……カン……キン

エルザ

「（ぐっ……重い）」

彼の攻撃は一撃一撃がとても重い。それに剣筋がとても鋭い。浮かしてある剣を使ってギリギリだ。

でも、さっきから少し変な感じがする

何か一撃毎に彼の気持ちに彼の気持ちが剣を通して伝わったくるような…

『余所見してる暇はないぞ！』

少し意識を逸らしているとタクトに攻撃され飛ばされる

しかし、エルザは飛ばされる瞬間黒く広がる空間の中にポツンと立っている彼とその瞳に映る復讐の炎が見えた

エルザ

「！………見えた」

ドゴーン……

エルザもグレイ達のように岩壁に衝突する

『どっしたもう終わりか？』

タクトは『その程度じゃないだろう？』と言わんばかりに問う

エルザ

「ふっ、そんなわけないだろう……ハアア！」

エルザはすぐに立ち上がり今度はエルザから攻撃し始めた

キン…キン…ガキン！…ギチギチ

二人は鏝競り合いになりお互いに近付きあう

『どうだ見えたか俺の心が……俺はわかったぞ、お前の実力も……心の鎧も！』

エルザ

「………そうか。私も見えたぞ君の壮絶な孤独と心の闇が」

エルザはタクトの言葉に驚きながらも先程自分が見えたものを言葉にして言った

『ふっ、…そうかお前には見えたか俺の心が』

タクトはエルザの答えを聞き、微かに笑った

エルザ

「……」

エルザはドキッとした

タクトに心の内を当てられたことにかもしくは悲しみを含んだ微笑みのせいかはわからないがエルザは確実にタクトのことが気になり始めていた

何なんだこの気持ちは？いや、今は戦いの最中だ考えるのは後にしよう

エルザ

「なあ……君の名前は何というのだ？」

エルザは何故かわからないが無意識に尋ねていた

『…タクト……タクト・インフィニティだ』

エルザ

「そうか…私の名はエルザ・スカーレットだ」

エルザはタクトの名前を聞き、自分も名乗った

『そうか…ではエルザそろそろ終わりにしようか』

タクトはそろそろだと思ひ提案した

エルザ

「そつだな。では、タクトに敬意を表して私の最高の剣技をもって  
応えよう」

エルザも同じことを思ったのか頷いた後言った

『ならば俺も剣技でもって応えよう』

お互いに答えるとスツと距離をとった

エルザは深呼吸をし、呼吸を整える

タクトは刀を鞘に納め、柄に手を置いたまま静かに構える

エルザ

「行くぞ……天輪・繚乱の剣！ ブルーメンブラッド」

エルザの周りに浮かんでいた剣が縦横無尽に飛び回りタクトに襲いかかる

エルザの剣がタクトに当たる直前

『守式居合い術式ノ型 幾千ノ十字架 サザンクロス』

咄くと同時にタクトの右手が消え静寂が場を包む

チンツと無音の世界の中で納刀する音が響く

ピキピキ……パキン

小気味好い音と同時に時間が止まったと思われた世界でエルザの全ての剣と鎧に十字に亀裂が走り碎け散った

エルザ

「やっぱり……敵わなかった……な」

フラツとエルザは崩れるように倒れる

『おっと……そうでもないぜエルザ』

タクトは倒れかけるエルザを優しく受け止めた  
そのタクトの頬からは血が流れていた

ルーシィ

「エルザ！」

ルーシィは慌ててエルザに駆け寄る

『慌てるな…ただ気絶させたただけだ』

タクトは安心させるように言った

ルーシィ

「えっ？」

ルーシィは訳がわからないように首を傾げる

『峰打ちだからな斬れてはいない………ところでお前達名前は？』

タクトは振り向き尋ねた

ルーシィ

「えっ？わ、私はルーシィだけど」

ハッピー

「オイラはハッピーだよ」

二人とも戸惑いながらも素直に答えた

『そうか…じゃあルーシィとハッピーちょっと手伝え』

ルーシィ／ハッピー

「えっ？」

「？」

二人とも頭に？を浮かべる

『「いっすらを町まで運ぶぞ」』

~~~~~

タクト達は町の小さな診療所に来ていた

『「こんばんは。オバさんちょっとベッドと薬借りるよ」』

タクトは馴染みの店のように入っていた

オバさん

「はいよ。タクトちゃんの頼みなら構わないよ。好きなだけ使っていきな」

オバさんは入って来たのがタクトだとわかると微笑みながら答えた

ルーシイ

「タクトって町の人と仲いいのね。言い方悪いけどタクトって町の人に嫌われてるのかと思った」

ルーシイは不思議に思ったことを隠さず言った

『町の人達にはいろいろ世話になってるからその時にちょっとな…  
…それよりこいつらさっさと部屋に運ぶぞ』

タクトも隠すことでもないと思い答えた

タクトは三人を部屋に運び、治療した後三人が起きるまでルーシイとハッピーと話していた

~~~~~

ナツ

「うっくん、はっ！オレはまだヤれるぞー！！」

ナツは起きたと思ったたらいきなり叫び始めた

グレイノルーシィノハッピー

「起きたと思ったらいきなり何叫んでんだよ」

「あつ、ナツ起きたんだ」

「ナツー戦いはもう終わったよ」

先に起きていたグレイとルーシィとハッピーはいきなり叫んだナツに驚きながらもツツコンだ

ナツ

「？なんだと、もう終わったのか!?!」

ナツは「いつの間に」という顔で驚く

グレイ

「ここは病院だ。それにお前の体見てみる…治療されてるだろ」

グレイは「気付けよ」と言わんばかりに答える

ナツ

「本当だ！？でもこれルーシイとかじゃムリだろ」

ナツは自分の体を見て再び驚いた

ルーシイ

「くっ、失礼ね（怒）」

『三人とも俺が治療したんだよ』

ドアが開くとタクトが部屋に入って来た

ナツ

「あ！お前はさっきの！..！」

ナツはタクトも見ると殺気を剥き出しにして睨み付ける

ナツ

「ちよっと落ち着きなさいよナツ」

ルーシイは今にも飛び掛かりそうなナツを抑える

『早まんなって。俺は敵対してる奴を運んで治療するほどお人好しじゃないよ』

タクトはナツを落ち着けるように言う

グレイ

「そういうことだ。タクトはもう敵じゃない」

グレイはタクトの言葉に付け足すように言う

ナツ

「グレイは何でこいつのことそんなに信用してんだよ」

ナツは何故グレイがタクトのことを庇うのかわからず訊いた

グレイ

「お前が寝てる間にいろいろ聞いたんだよ…それに実際助けてもらってるじゃねーか」

グレイはさも当然のように言った

ナツ

「納得いかねー！！」

ピクッ

ナツが叫ぶとさっきまで動かなかった人物が起き上がった

エルザ

「グレイの言う通りだ。タクトは悪い奴じゃない」

さっきまでの話を聞いていたのかエルザもタクトを擁護する

ルーシィノグレイ

「あつ、起きたのねエルザ」

「おっ、起きたか」

『よく寝てたな…キズの具合はどうだ？』

タクトはナツのことは気にせずエルザに声をかけた

エルザ

「少し痛むが問題ない…それにあの時手加減してくれたんだろ」

『まあ少しな』

タクトは『気付いてたか』という顔で苦笑する

エルザ

「ところで……その……この治療はタクトがしてくれたのか？」

エルザは少し恥ずかしそうに訊いた

『?……そうだけど』

エルザ

「…そうか／＼」

エルザは耳まで真っ赤に染めて俯いた

『どうした？顔が赤いぞ…熱でもあるのか？』

タクトは急に顔を真っ赤にしたエルザの顔を心配そうに覗き込む

エルザ

「も、問題ない／＼……と、ところでタクトはこれからどうする

つもりなんだ？」

エルザはこれ以上顔を見られたくないのか話を変えた

『そつだな…エルザ達ほどの手練れがこれからも来るとなると町の人達に迷惑がかかるからな。また何処かに移るしかないかな』

タクトはエルザの言動に納得しないながらもこれからどうしようか  
思案する

エルザ

「だったら私達のギルドに来ないか？」

エルザはそんなタクトに提案する

ルーシィ

「ちよつとエルザそれ本気!？」

グレイ

「それは不味いんじゃないか? だいたい俺達の依頼はタクトの…」

ルーシィとグレイはエルザの提案に反論しようとするが

エルザ

「確認と調査だろ…別に討伐や拘束じゃないんだ。調査まで終わればその後何したって問題ないだろ？」

グレイ

「まあ確かにそうだけど」

グレイはエルザに丸め込まれて何も言い返せなかった

ナツ

「仲間が増えるんだっいたら何だったいいじゃねーか」

グレイ

「お前さっきまで言ってることと違うじゃねーかよ」

ハッピー

「あい、ナツはバカだからしょうがないよ」

ナツは騒いでグレイとハッピーは呆れていた

エルザ

「ナツ達もこう言ってる。どうだタクト…私達のギルドに入らないか？」

『そうだな……他に行く当てもないしな……いいよ入ってやるよ』

エルザ

「そうか。ならばこれからよろしく頼むぞタクト」

エルザは嬉しそうにタクトに手を差し伸べる

『ああ、こちらこそよろしく』

タクトは微笑んで手を握った

エルザ

「!?!?……//」

エルザはまた頬を染めて俯く

ナツ

「よっしゃー！。今日は新たな仲間が増えたことを祝って宴だー！  
」!

~~~~~

ナツ

「…宴だー！ー！」

…仲間か…まさか俺に仲間が出来るとはな……まあこいつらは俺の知ってる人間達と少し違うからそのせいかな

『（あの精霊が言っていたのはこいつのことなのか？）』

タクトは騒いでるナツ達を見つめながら考える

まあそれはこれから判るか……さてお前達は俺にどんな未来を見せてくれる？

### 第三魔法：新たな仲間（後書き）

やっぱり戦闘シーンは難しい

全然上手く出来なかった（泣）

もっと上手く出来るよう頑張ります

あとナツとグレイファンがいたら申し訳ない

今回はエルザとの絡みを書きたかったので早々にKOさせていた  
だきました

もし感想などあったらよかったらお願いします

## 第四魔法：いざフェアリーテイルへ

タクトが仲間になったその日は夜も遅いので休むことにし、翌日フェアリーテイルに向かって出発した

その歩いている途中

『そういえば俺を調査するよう依頼した依頼主って誰か判るか？』

グレイ

「？…今回は評議院から直々にきてやつだぜ」

グレイは何故そんなことを訊くのか不思議がりながらも答えた

『そうか……だが、たぶん依頼の大元は闇ギルドだぞ』

グレイ

「なんだと！？」

エルザ

「どういうことだ。もっと詳しく教えてくれ」

エルザもタクトの発言に驚き、訊き返してくる

『エルザ達は俺を探す時白い悪魔の名で探していただろう…でも、その名はまだ闇ギルドの中でしか広まってない筈なんだ』

エルザ

「何故だ？」

『あの姿はまだ連中にしか曝していないからな』

まあ本当は目立って俺だけを狙わせるためなんだけどな

そつえば特に手を出してこなかったから後回しにしたギルドがあったな

たぶん依頼したのはそこだろうな

『よし、じゃあちよつと行ってくる』

ルーシィ

「えっ？ちよ、ちよつと何処行くのよタクト！」

『依頼主の所。ちよつと心当たりあるから……潰してくるわ（笑）』

換装 疾風と言うとタクトは笑顔のまま風に包まれて飛んで行ってしまった

ナツ

「スゲー、タクトって空飛べたのか!？」

グレイ

「いや驚くところそこじゃねーだろ …… エルザいいのかタクト一人行かして」

エルザ

「問題ないだろ。グレイだってタクトの強さは知ってるだろ」

タクトがいなくなった後しばらく経つと突然空が暗くなり雷雲が立ち込め始めた

ルーシー

「何なのよ〜さっきまであんなに晴れてたのに〜」

エルザ

「これは一雨来るかもしれんな」

その時

…ゴロゴロ…ピカッ…ズガガアーン…

物凄い音と共に巨大な雷が少し離れた所にあつた建物の上に落ちた

ルーシィ

「キヤーー！」

グレイ

「うおっ!？」

ナツ

「スツゲー雷だな!!」

エルザ

「ツ!？なんと巨大な」

ハッピーは震えて丸くなり四人が驚いているとタクトがひょっこりと帰ってきた

『ただいま』

グレイ

「タクト!?!…まさかと思うがさっきのやつはお前がやったのか?」

タクトが戻ってくるなりグレイはすぐさま問いただした

『そだよ…メンドかったから手短に終わらせてきた』

ルーシィ

「……………」

ナツ

「スゲー!!」

エルザ

「ふむ、さすがタクトだな」

タクトの答えにルーシィは呆れ、ナツは目を輝かせ、エルザは一人頷いていた

『ほらお前等の為に手早く済ませたんだからさっさと行くぞ』

そう言うとタクトは何事もなかったように歩きだしナツ達も慌てて追いかけて行った

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

タクトが闇ギルドを潰して少し歩いた後電車に乗り、無事マグノリアに着いた

やっと着いた。エルザが言うにはここにフェアリーテイルが在るらしい。さつき町の人に話を訊いたが、評判も上々だった

なんでもフェアリーテイルはここ数年で力をつけてきたギルドで今では近くにあるファントムロードとも張り合えるほどらしい

『（やっぱり第一印象は大事だよな）』

タクトがブツブツ言いながら歩いていると急にエルザが立ち止まった

エルザ

「着いたぞ…ここが私達のギルド…フェアリーテイルだ」

タクトが悩んでる間にどうやらフェアリーテイルの前まで来ていたようだった

『ほお、中々立派なギルドだな』

タクトは今まで闇ギルドの建物しか見てこなかったため、正規ギルドの建物の立派さに少しばかり驚いていた

やっぱり最初は派手にいった方がいいよな

『よし決めた』

ルーシイ

「えっ何を？」

ルーシイが訊き返そうとタクトの方を向くとタクトは片足を上げて立っていた

そしてタクトは笑みを浮かべたままその足を振り抜いた

ルーシイ

「ちよつと何してんのー!？」

~~~~~

タクトがドアを蹴り破る一分前ギルドでは…

レヴィイ

「ミラ、ルーちゃん達いつ帰ってくるの？」

ミラジエーン

「もうそろそろ帰ってくる頃だと思っただけど…」

マカロフ

「心配ない。罰といっても奴等なら大した仕事じゃない筈じゃ」

その時突然ドアが吹き飛び砂埃が舞い上がった

ワカバ

「なんだなんだ!?!」

マカロ

「敵襲か!?!」

すると砂埃の奥から「ちょっと何してんのー!?!」や「やっぱり第一印象は大事だと思って」と言う声と共にタクト達が入ってきた

ナツ

「じつちゃんただいまー!?!」

グレイ

「今帰ったぜ」

エルザ

「マスターただ今帰りました」

マカロフ

「おかえりなさい。それにしても随分派手な到着じゃの」

エルザ

「騒がしくてすみません」

マカロフは見慣れぬ顔がいるのが気になったのかタクトの方をチラッと見た後

マカロフ

「まあ騒がしいのはいつものことだからのう……それで、仕事の方はどうじゃった？」

その問いにエルザは少し苦笑いしながら

エルザ

「まあ……ちゃんと完遂はしました」

マカロフ

「そうか……それじゃあ調査報告書とかあるかの」

エルザ

「いえ、報告書はありませんが……」

そう言った後エルザはタクトの方を向いて

エルザ

「……彼が今回の調査対象本人です」

そう言った瞬間、場に沈黙が訪れて数秒後…

エルザ達以外一同

「……なんだってー!!」「」

ジエツト

「おいおい本人連れて来ていいのかよ」

ドロイ

「いや良くないだろう」

皆が驚いている中当の本人は  
『何なんだよ。いきなり大声出しゃがって』と、自分が話題の中心  
になっている事に気付いていなかった

マカロフ

「……エルザ、いったいどういふことじゃ」

エルザ

「実は……」

エルザは村で起こった事などを事細かに説明した

マカロフ

「ふむ……なるほどな。事情は大体分かった……それでタクトはフエアリーテイルに入りたいたい」

『まあ、迷惑でなければ』

タクトは柱にもたれながら答えた

マカロフ

「ええよ入りなさい。うちは入りたい者拒まずじゃ」

一同

「『ええー！』」

マカロフはニコニコしながら答えるもギルド内からまた声上がる

ミラジエーン

「マスターいいの？もし本当に危ない奴だったら……」

ミラジエーンは心配になりマカロフに訊く

マカロフ

「あのエルザが認めた程の男じゃ、問題ないじゃろ」

それに…と続けようとしてマカロフは口を閉じた

マカロフ

「（それにあの少年いろいろワケありっぽいしの）」

ミラジエーン

「マスター？」

ミラジエーンは急に黙ってしまったマカロフに声をかける

マカロフ

「ミラ、後のことは任したぞ」

ミラジエーン

「は〜い、任せました」

ミラジエーンは大きく手を揚げて了解するとパタパタと走ってタクトの元に向かって行った

~~~~~

マカロフ

「ええよ入りなさい。うちは入りたい者拒まずじゃ」

……いいのかそんなんで

入れてくれるのはありがたいがもし俺が悪者だったらどうすんだよ

……いや問題ないか……あのじいさんただ者じゃなさそうだし

タクトが一人で思案しているとミラジエーンが声をかけてきた

ミラジエーン

「初めまして、私の名前はミラジエーンよ。気軽にミラって呼んでね。それじゃあ今からギルドの説明するわね」  
（ニコッ）「

ミラジエーンは握手するために笑顔で手を差し伸べた

『……俺の名はタクトだ。こちらこそよろしく』  
（ニコッ）

と言うとタクトも笑顔で手を握った

ミラジエーン

「／／／」

『（？……何だいきなり顔を真っ赤にして）』

タクトとしては笑顔で挨拶されたので、笑顔で返したただけなのだが、本人はその笑顔が一撃必殺のスマイルになってることを知らなかった

『おい、大丈……』

夫か？と声をかけようとした時後ろから物凄い視線と殺気を感じた  
タクトが恐る恐る振り返ってみると

エルザ

「……………」

『（何故だ！？何故エルザはあんなに俺のことを睨んでるんだ！）』

エルザ

「……………フン」

タクトが内心冷や汗を流しているとエルザはプイツと顔を背け何処かに行ってしまった

エルザのことはよく分からなかったがタクトは未だに放心してるミラジェーンを先に対処することにした

『あゝ、ミラさん？』

ミラジェーン

「は、はい……」

『そろそろ説明して欲しいんだけど』

ミラジェーン

「そ、そうね。じゃあこっちへ」

ミラジェーンはまだ少し動揺しながらも説明を始めた

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ミラジエーン

「はい、以上説明終了。何か質問とかある？」

『いや、特には』

ミラジエーン

「じゃあギルドマーク打つわね。どこがいい？」

『……じゃあここ』

タクトは左手の手袋をとって手の平を見せた

ミラジエーン

「（綺麗な手だな）……はい、OK。これでタクト君もフェアリー  
ーテイルの一員ね」

~~~~~

タクトがミラジエーンがから説明を受けている一方で何処かに行っ  
ていたエルザは……荒れていた

エルザ

「何なんだ、これは」

タクトとミラのやつが仲良さそうにしていた

それは仲間になったのだからまだ良い

でも、タクトがミラに笑顔を見せた時私の中にどす黒い何かが渦巻いているような気がした

エルザ

「ッ」

エルザが自分の中に生まれた何かについて悶々としながら歩いていくと

マカオ

「おいエルザ、あの新人お前が連れて来たんだってな」

ワカバ

「ちょっと話聞かせてよ」

エルザ

「……………」

エルザは無言で近付いてくる

マカオ

「お、おいエルザ？」

ワカバ

「どーしたんだよ？」

二人は返事がないエルザを不思議に思う

エルザ

「……………」

しかしエルザはまだ無言で歩いてくる

マカオ

「え、ちょ、エルザさん？」

ワカバ

「これなんかヤバくねーか？」

エルザ

「……………」

エルザが二人と衝突する三秒前

マカオノワカバ

「「ちよ、エルザさんストーップ!!」」

ドンガラガッシャーン

二人の叫びもむなしく盛大に衝突事故が起きた

~~~~~

『ふう………』

タクトはミラジェーンからの説明も一通り終わり休んでいた

なんか説明の途中、後ろで物凄い音が鳴っていたけど気にしないことにした

タクトが適当に見回ってみようかと思っていると後ろから声をかけられた

?????

「おーいー!」

『?』

タクトが振り返ってみると青髪の女の子が走り寄ってきた

レビィ

「タクト君だよ。初めまして私はレビィ、ヨロシクね」

『ああ、よろしく』

レビィ

「ノノノ（やっぱり遠くから見るとより近くで見るともっとカッコいいな）」

何なんだろうこの娘は……目を輝かせながら近付いてきたと思ったらいきなり頬を赤らめて俯いて…

タクトがレビィのコロコロ変わる表情に苦笑いを浮かべていると突然レビィが顔を上げて

レビィ

「あ、あのノノノ…今度よかったら一緒にお仕事でも行きませんか？ノノノ」

『?……まあ別にいいけど』

レビィ

「ホント！？やったー！！」

タクトが勢いに押されて承諾するとレビイはとても嬉しそうに喜んでいた

その後レビイとチームを組んでるジェットとドロイ達とも挨拶した

その時何故か物凄く睨まれたけどスルーした

他にもカナやエルフマンなどいろいろな人達に囲まれワイワイ騒いでる間にその日は過ぎていった

第四魔法：いざフェアリーテイルへ（後書き）

やっとギルドに入れた

もっと早目に入れると思ってたけど意外と時間が掛かってしまった

まあこれからは原作沿いに行けると思っているので頑張ります

**第五魔法：S級魔導士（前書き）**

原作と少し順番が替わってますがまあ気にしないで下さい

## 第五魔法：S級魔導士

ナツ

「どつちが早いか勝負だコラアアアー！」

何故だ、何故こんな事になった

俺はただ仕事に行きたかっただけなのに

フェアリーテイルに入り一夜が過ぎて、タクトは仕事をするためにリクエストボードの前に立っていた

『お金もあまり持ってこなかったし、仕事しねえとな』

タクトがどんな仕事があるのか見ていると

ナツ

「おっ！タクト仕事行くのか？だったらオレたちも行くぜ！」

ナツとハッピーが後ろからやって来て、ナツが肩を組んできた

『?.....仕事には行くけどなんでナツたちがついてくるんだ?』

タクトが肩からナツの腕を退しながら答える

ナツ

「だってオレたちもうチームだろ?」

ナツはさも当然のように言った

『チーム?俺がいつチームに入ったんだよ』

ナツ

「えっ違うのか!?オレはてっきり仲間になってくれるって言ったからオレたちのチームに入ってくれと思ったのに」

ナツは今初めて知った的な顔で驚く

『確かに仲間に入るとは言ったけどチームに入るって意味じゃないぞ

それにナツたちのチームに入るとエルザはまだしもナツとかグレイとか足手纏いになりそうだし』

タクトが苦笑しながら冗談めいて言う

ナツ

「なんだ「聞き捨てならねえな」」

ナツが言い返そうとした時 그레이が割り込んできた

그레이

「クソ炎はともかくオレまで足手纏いにされるのは心外だなあ」

『えっ？いや、そこまで本気にされると困るんだけど』

タクトが 그레이の対応に困っていると ナツが炎を吹きながら叫んだ

ナツ

「だったらどっちが早いか勝負だ コラアアアー!!!」

『……………』

ここで冒頭に戻る

まあ話を要約するところだ

俺とナツたちがそれぞれ一つ仕事をこなしてどっちが早く終わって帰ってくるかの勝負らしい

で、俺が負ければチームに入り、勝ったら諦めるという取り決めなのだが

話の途中でエルザが「面白そうだ、私も参加させてもらおう」とか言って乱入してくるし、ルーシイもいつもの流れで行くことになって結局1対5になってしまった

『なあ、さすがに1対5はズルくね?』

エルザ

「何故だ? 私達いつもこのメンバーで行ってるのだから問題ないだろう(これでタクトは私達のチームに…… / / /)」

エルザはもう勝ち誇ったような表情で返す

『(ったく、こんなんで勝ったって意味ないだろうに)』

エルザの含み笑いの意味も知らずタクトは諦めてリクエストボードに向き直した

エルザ

「…タクト、判ってると思うがいくら早くとも身の安全が第一だぞ」

エルザはさっきと一転して真剣な顔つきで言う

『りょーかい』

タクトは気の抜けた返事した後一枚紙を取ってマカロフに渡した

『じゃあマスター、これ行ってくる』

マカロフ

「…タクト、一人で大丈夫か？」

『ああ』

マカロフは渡された紙を見て真剣な眼差しで訊くもまた軽い返事して出て行ってしまった

ミラジエーン

「マスター、どんなクエストだったの？」

そう言ってミラジエーンはマカロフの手元を覗き込んだ

ミラジエーン

「……これって」

マカロフ

「無事だといいいのだがな」

ランク：AAA

依頼名：深淵の魔獣ケルベロス三体討伐

報酬：600万」

依頼内容：街との交通路に三つ首のバケモノが住み着いてしまいました。

これでは貿易もままなりません。

至急退治して下さい

~~~~~

タクトが一人でAAA級のクエストに行くとナツたちも後を追うようにA級のクエストに出発した

それから三日後

ナツ

「いや、今回も楽勝だったな」

グレイ

「結構やられてたくせに何言ってるんだよ」

エルザ

「いいじゃないか今回も無事に帰ってこれたのだから」

ナツたちは多少苦労しながらも見事依頼を達成してマグノリアに帰ってきた

ナツ

「ただいま！」

マカロフ

「おおナツか、おかえり」

ナツは勢いよく扉を開けて挨拶もそこそこに辺りを見回した

ナツ

「じつちゃん、タクトは？」

マカロフ

「タクト？あやつならそこにいるぞ」

ナツはマカロフが指差した方を向くとマグカップを机に置いて優雅に読書をしているタクトを見つけた

ナツ

「だあー、負けたー！」

ナツは声を上げて落ち込む

とその声に反応したのかタクトは本から顔を上げた

『ん？ああ、帰ってきたのかナツ』

落ち込むナツを尻目にエルザたちが声をかけてくる

グレイ

「おいおい本当に一人で終わらしたのかよ」

エルザ

「さすがタクトだな。私でもあれに行くのは正直気が引けたのに」

『数が複数いただけでそんな大した仕事じゃないさ』

ルーシイ

「それでもスゴいよ。私なんてみんなと一緒に絶対ムリだもん」

ハッピー

「あい、ルーシイはバルカンですら怯えてたもんね」

四人と一匹で話しているといつ復活したのかナツが割り込んできた

ナツ

「ところでタクトはいつ帰ってきたんだよ」

ナツはムスツとしながらも少し気になったのでタクトに訊いた

『ん？俺もさつき帰ってきたばかりだよ……評議院から』

タクトは口をつけていたマグカップを離しながら衝撃発言をした

四人と一匹

「……は??」「」「」「」

ナツたちはタクトの発言が理解出来ないのかポカンとしている  
その中でグレイがいち早く立ち直って

グレイ

「まてまて、なんでタクトが評議院から戻ってくるんだ？」

『？……なんでって、S級の称号貰うため？』

タクトは少し考えた後サラリとまた爆弾を投下した

エルザ

「！？……マスターどういう事ですか？」

エルザは堪らずマカロフに訊いた

マカロフ

「そうじゃったな、お前らはまだ知らなんだな」

とそこで一回言葉を切ってからまた口を開いた

マカロフ

「実はの…タクトとエルザたちが出発してから4、5時間後くらいだったかの

その頃にタクトが突然帰ってきての「どうしたのじゃ？」と訊けば『終わった』と一言言ってまた次のやつに行きおったのじゃ

それも4時間くらいで帰ってきてなもうみんなビックリじゃった」

ほっほっほと笑いながらマカロフは続けた

マカロフ

「次の日も同様に二つほどこなしての

それでワシは日は浅いが実力は充分だと思つて今日の分も入れて申請したら受理されての

じゃからさっき評議院に行つてもらつたのじゃ」

ナツたちは眼を見開いて驚いた

そして一番の疑問を口にした

グレイ

「五つ成功しただけでS級に上がるってどんな依頼受けたんだよ」

マカロフ

「何じゃったかのミラ」

マカロフは振り向いて訊くとミラジエーンはカウンターの下から依頼書を取り出して

ミラジエーン

「えっと、“ケルベロス討伐”から始まって

“海の暴れ神ポセイドン討伐”

“凍土の番人ツンドラワイバーン討伐”

“火山の悪魔ヴォルカニックデビル討伐”

“霧幻島の呪い解決”  
の五つね」

マカロフ

「そうじゃったな。どれもこれも一筋縄でいかんのはかりじゃ霧幻島に至っては五年クエストじゃしの」

グレイ

「ったく、全部AAA級じゃねえかよ」

エルザ

「凄いな、私でも一人で行ったら無キズじゃすまないぞ」  
ルーシー

「私霧幻島って聞いた事ある。確か何人も行方不明者が出てるって」

ハッピー

「あい、霧幻島ってS級じゃないけどガルナ島と同じくらい危険なやつだよね」

タクトが片付けた依頼を聞いて各々また驚いていると一人黙り込んでブルブル震えてる者がいた

ナツ

「チツクショー、ズリーぞタクトだけS級になりやがってオレと勝負しろコラー！」

そう叫びといつの間にか椅子に座ってまた読書をしているタクトに殴りかかった

だが、そこはタクトだ

ナツの攻撃を跳んで躲すとそのまま体を捻ってナツの後頭部に足を振り下ろした

ゴッ……ゴロゴロ……ドゴォ……

ナツは壁まで吹っ飛び、タクトは華麗に着地した

『仕方ないな、もう読み終わるから少し待ってる』

ハッピー

「終ー了ー」

エルフマン

「ぎゃはははっ！だせーぞナツ」

エルザはナツたちのやり取りを横目にマカロフに話しかけた

エルザ

「マスター、今回は試験はやらないのですか？」

マカロフ

「今回はS級になれそうな者が少なかったからの出来なかったのじや」

エルザ

「そうですね…まあタクトの実力なら試験をやらずにS級になっても納得出来ます」

マカロフ

「ふむ、そうか…そういえばもう一つ伝える事が…」

ミラジエーン

「どうしました？マスター」

『！……………絶界』

途中で黙ってしまったマカロフをミラジエーンは不思議そうに見る

それと同時にタクトは何か気付いたのか小さく呟くと白い半透明

状のオーラのような物を体に纏わせた

マカロフ

「いや…眠い…奴じゃ」

マカロフが言うや否やみんな凄まじい眠気に襲われパタパタと倒れていく

つつかつかつか

マカロフ

「ミストガン」

ミストガンは入口から入ってくるとおもむろにリクエストボードの前に立ち、一枚取ってマカロフの前に出した

ミストガン

「……………」

マカロフ

「?…どうしたんじゃミストガン」

マカロフがミストガンの視線の先を辿るとみんなが寝ている中まだ読書をしているタクトに向いていた

『……………』

マカロフ

「彼は新しく入った仲間での、名はタクトじゃ」

ミストガン

「…知ってる……………仕事先で知り合った」

マカロフ

「!…なんじゃもう知り合いじゃったのか」

ミストガン

「行ってくる」

そう言つと踵を返して扉に向かって歩いて行った

マカロフ

「これっ!眠りの魔法を解かんかっ!」

ミストガン

「伍…四…参…弐…壱」

一同（ナツ以外）

「ぱちっ」『……………解』

シエット

「こ…この感じはミストガンか!？」

ドロイ

「あんにやるオ!！」

みんな慣れた出来事なのか意外と落ち着いていた

そんな中聞き慣れない言葉があつたのか頭に?を浮かべている者がいた

ルーシイ

「ミストガン？」

ロキ

「フェアリーテイル最強の男候補の一人だよ……はっ！」

ロキはルーシイと目が合うと静かに後退りしていく

グレイ

「どういつ訳か誰にも姿を見られたくないらしくて仕事を取る時はいつもこうやって全員眠らせちゃうのさ」

ルーシイ

「なにそれっ!あやしすぎ!！」

グレイ

「だからマスター以外誰もミストガンの顔を知らねえんだ」

ラクサス

「いんや……オレは知ってっぞ……それにその新人もな」

グレイやルーシイが話していると二階から話しかけてくる奴がいた

ナツ

「ピクッ！」

グレイ

「もう一人の最強候補だ」

ルーシイ

「!!!」

ラクサス

「ミストガンはシャイなんだあんまり詮索してやんな」

ナツ

「ラクサスー！オレと勝負しろーっ！！」

ナツは机の上に乗ってラクサスに勝負をふっかける

ウォーレン

「さっきタクトにやられたばっかじゃねえか」

ラクサス

「そうそうエルザやその新人ごときに勝てねえようじゃオレには勝てねえよ」

『……………』

エルザ

「それはどういう意味だ」

タクトはパタンと本を閉じると無言でラクサスを睨み付ける

エルザの背後にはゴゴゴツと聞こえるぐらいのオーラが見えた

ラクサス

「つまりオレが最強って事さ」

ナツ

「降りてこい！コノヤロウ！！」

ラクサス

「お前が上がってこい」

ナツ

「上等だ！！」

そう言つと同時にナツは走り出した

しかし、マカロフが腕を伸ばしナツは取り押さえられてしまった

マカロフ

「二階には上がってはならん…まだな」

ラクサス

「ははっ！怒られてやんの」

ナツ

「ふぬう…」

マカロフ

「ラクサスもよさんか」

マカロフは未だにナツも挑発するラクサスを注意する

ラクサス

「フェアリーテイル最強の座は誰にも渡さねえよ」

エルザにもミストガンにも新人にもあのオヤジにもな」

ラクサスはそこで言葉を切ってから全員に刻み込むように言い放った

ラクサス

「オレが…最強だ…！」

そう言うとラクサスは奥に戻っていった

マカロフ

「まったくあいつもいつまでも最強の座に固執しおって」

エルザ

「構いません。事実ラクサスは強いのですから

そういえばマスター、私に何か伝えたい事があったのでは？」

マカロフ

「おおそうじゃったな

実はの…タクトにはこれからはエルザたちに同行してもらおうと思  
うのじゃ」

エルザ

「それはホントですか!？」

エルザにしては珍しく感情を露にして身を乗り出す

エルザは内心賭け勝負に負けた事に落ち込んでいたが予想外の申し  
出に舞い上がった

マカロフ

「ナツとグレイの世話するのも一人じゃ大変だろうし

それに…エルザも一緒の方がいいじゃろ」

エルザ

「!!!／／／」

マカロフは含み笑いをした後「若いの」と言って笑っていた

レビィ

「ええ、タクト君ルーちゃんたちのチームに入っちゃおうの？」

『らしいな。俺もさつき聞いたばかりだよ』

レビィ

「ぶう、タクト君には私達のチームに入って欲しかったに」

『そうスネるな。チームは違っても仕事は一緒に行けるだろ？』

レビィ

「むう」

タクトはまだ拗ねるレビィの頭を優しく撫でてやった

レビィ

「ん」

『じゃあエルザさっそく仕事に行こうか』

エルザ

「……そうだな」

タクトは気持ち良さそうなレビィを尻目に何故か少し不機嫌そうなエルザに声をかけたが素っ気ない返事が返ってくる

そこでタクトは気を取り直してナツと 그레이にも声をかけた

『ナツと 그레이も行くか?』

ナツ

「よっしゃー!行こーぜ!」

그레이

「もうチームだからな行ってやるよ」

タクトの誘いにナツも 그레이も了承する

ルーシィ

「えつとー、これは私も行くパターンだよね」

ハッピー

「あい、ルーシィもチームの一員だからね」

結局ルーシィも一緒に行く事になり五人と一匹で出発した

その後もいくつか仕事に行って数日が過ぎた

~~~~~

ナツ

「それにしてもタクトが入ってから終わるの早いよなー」

グレイ

「そうだな、ナツのミスとか全部カバーしてくれるしな」

ナツ

「なんだとコラァー！」

ルーシィ

「ちよつとこんなところでケンカしないの」

タクトたちはまた一つ仕事をこなしてマグノリアに帰ってきた

ひそひそ…ぞわぞわ

街を歩いていると人々が何かにざわついていた

『？』

エルザ

「何だ…？ギルドの様子がおかしい…」

ルーシイ

「な…なに？…え？」

グレイ

「これは……」

タクトたちは絶句した

何故ならそこには自分達が仕事に行く前に見たギルドの姿など見る影もなく鉄柱が至る所に突き刺さりボロボロになったフェアリーテイルがあつたからだ

ナツ

「オレたちのギルドが…!!」

## 第五魔法：S級魔導士（後書き）

まああれです

今回はつなぎです

早めにタクト君をS級にしたかったのですが先のことを考えると夕イミングがなかったのでここに無理矢理ぶち込みました

おかげでグダグダになりましたm（| |）m

まあ最後で判ると思います。次はファントムロード編ですね

自分的にここが最初の山場となると思うので頑張ります

## 第六魔法：ファントムロード（前半）

タクトたちがボロボロになったギルドを前に呆然としているとミラジエーンがタクトたちが帰ってきた事に気づき彼らをギルドの地下一階に連れて行った

そこではファントムロードへの不満が溜まり険悪なムードが漂っていた

しかし、そんな中でも一人だけ普段通りの人物がいた

マカロフ

「よっ、おかえり」

マカロフは片手を上げて6人の帰りを迎えた

エルザ

「ただいま戻りました」

『…ただいま』

ナツ

「じっちゃん！酒なんか呑んでる場合じゃねえだろ！！ギルドが壊されたんだぞ！！」

ナツはマカロフの普段と変わらぬ態度に怒りを覚え怒鳴った

『落ち着けナツ』

たかがギルドが少し壊されたただけだろ』

マカロフ

「タクトの言う通りじゃ

そう騒ぐ程の事でもなかるつに」

グレイ

「何っ!？」

グレイはマカロフの思ってもみなかった言葉に驚く

マカロフ

「ファントムだあ？」

あんなバカタレ共にはこれが限界じゃ

誰も居ねえギルドを狙って何が嬉しいのやら」

マカロフは酒をぐびぐび呑みながら答えた

エルザ

「誰も居ないギルド?」

エルザは事情がよくわからずミラジエーンに訊いた

ミラジエーン

「どうも襲われたのは夜中らしいの」

『やはりな

血も落ちてなかったし怪我人も出なかったんだろっな』

マカロフ

「不意打ちしか出来んような奴等に目くじら立てる事はねえ放つておけ」

ナツ

「納得いかねえよ!!オレはアイツ等潰さなきゃ気が済まねえ!!」

ナツはまだ不満が有るのか引き下がらない

マカロフ

「この話は終わりじゃ

上が直るまで仕事の受注はここでやるぞい」

ナツ

「仕事なんかしてる場合じゃねえよ!!」

マカロフ

「つーかちょっと待て……漏れそうじゃ」

マカロフはナツ軽く受け流し内股のままトイレに行ってしまった

ナツ

「何で平気なんだよ……じっちゃん」

ミラジェーン

「ナツ……悔しいのはマスターも一緒なのよ」

「ただギルド間の武力抗争は評議会で禁止されているの」

「ミラジェーンは未だに納得してないナツを優しく諭す事しか出来なかった」

~~~~~

ルーシイ

「なぐんか大変な事になっちゃったな」

ブルー  
「プーン」

ルーシイ  
「ファントムっていえばフェアリーテイルと仲が悪いって有名だもんね」

ルーシイは家に帰るために川沿いの道をブルーと一緒に歩いていた

ルーシイ

「あたし本当はどっちに入ろうか迷ったんだー」

ブルー

「プーン？」

ルーシイ

「だってこっちと同じくらいぶつとんでるらしいし」

でも、今はこっちに入って良かったと思ってるの  
だってフェアリーテイルは…」

そう言いながらルーシイは部屋の扉を開けた

グレイ

「おかえり」

ハッピー

「おかー」

エルザ

「いい部屋だな」

ナツ

「よォ」

ルーシイ

「？サイコーー！！」

ルーシイの部屋にはタクトを除くいつものメンバーが既に寛いでいた

ルーシイ

「多いっつのー！！」

ゴンツ

予想外の客人と人数に驚いたのか持っていたカバンをナツに投げ付けた

エルザ

「ファントムの件だが奴等がこの街まで来たという事は我々の住所

も調べられてるかもしれないんだ」

エルザはナツとルーシィのやり取りを無視して話し始めた

グレイ

「まさかと思うが一人の時を狙ってくるかもしれないぞ」

ハッピー

「だから暫くはみんなでいた方が安全だ…ってミラが言ってたんだ」

ルーシィ

「そ…そうなの！？あつ、でもタクトは？」

ハッピー

「タクトなら一人で大丈夫だ…って言って帰っちゃったよ」

ハッピーに続いてエルザも付け加えるように言った

エルザ

「タクトなら一人でも大丈夫だろう」

ルーシィ

「前から思ってたけどエルザってほんとタクトの事信用してるわよね」

エルザ

「なっ!？わ、私はただ事実を言っただけだ!！」

ルーシイは普段見られない狼狽えるエルザの姿を見て悪戯心が芽生えた

ルーシイ

「ふくん、でもエルザ顔赤いわよ」

エルザ

「?!?!…も、もうこの話は終わりだ!!!／／／」

ルーシイ

「ふふっ」

最初の話題は何処へやらルーシイの部屋では少しの間エルザの音が響いた

~~~~~

一方タクトの家では

『ふい〜、スツキリした』

タクトはタオルを片手に髪を拭きながら手元の資料に目を落とした

実はナツたちと別れた後タクトは独自でファントムロードについて調べていた

『コイツ等がファントムの主なメンバーだな』

タクトは資料をパラパラと捲って読んでいく

マスターと互角の魔力を持つと言われている聖十大魔道士のマスター・ジョゼ

S級魔導士並みに強いエレメント4

今回のギルド強襲の犯人と思われる鉄のドラゴンスレイヤー鉄竜のガジル

『まあ、ジョゼはマスターがやるだろうし他もなんとかなるだろう

それよりも問題はこっちなな』

タクトは別の資料を手に取った

『これが本当だったらアイツが危ねえな』

タクトは軽く目を通すと資料を机に置いて寝床に入ってしまった

その資料にはハートフィリア嬢捕獲と書かれていた

~~~~~

翌日

マグノリアの街南口公園にて

…ざわざわ…ざわざわ

公園では昨日以上に街の人がざわついていた

エルザ

「すまん通してくれギルドの者だ」

ナツ

「?!?!」

ナツたちが公園の中央にある大木の前まで来るとそこにはボロボロになり木に礫にされたレビィ、ジェット、ドロイがいた

ルーシィ

「レビィちゃん…」

グレイ

「ジェット…ドロイ…」

マカロフ

「ファントム…」

マカロフが目を伏せながら少し遅れてやって来た

『マスター、流石に俺も我慢ならねえぞ』

マカロフ

「ああ、わかつちよる

ワシもボロ酒場までなら我慢出来たんじゃがな

じゃが、ガキの血を見て黙ってる親はいねんだよ」

バキィ

マカロフの握り締められた手によって杖が粉々に粉碎された

マカロフ

「戦争じゃ!!」

マカロフは鬼の形相で宣言した

~~~~~

フィオーレ王国

北東オークの街

そこに魔導士ギルド幽鬼の支配者はあった

男A

「だっはー！最高だぜー！！」

男B

「妖精の尻尾お尻のケツはボロボロだつてよ」

男C

「今頃羽をすり合わせて震えてるぜ」

男D

「あっ！いけねこんな時間だ」

約束の時間が近いらしく男Dは仕事に行く為に扉に向かっていった

ドゴォーン

爆発音と同時に扉と男Dが吹き飛んだ

マカロフ

「フェアリーテイルじゃああっ!!」

そこにはマカロフを始めとするフェアリーテイルの面々が怒りの形相で立ち並んでいた

男A

「なっ!!」

ナツ

「おおおああ…らあっ!!」

ナツが拳を振るうと近くに居た男達は塵のように吹き飛んでいった

ナツ

「誰でもいい!かかって来いやあ!!」

男C

「調子に乗るんじゃないやねえぞコラ!やっちまえー!!」

『貴様等こそあんまり調子に乗るなよ』

刹那を片手にどんどん敵を斬り伏せていく

エルザやグレイたちも自分の魔法を駆使して次々と敵を倒していく

男 E

「マスター・マカロフを狙え!!」

マカロフ

「かぁーっ!!」

ファントムの魔導士達が集団で襲いかかるが巨大化マカロフに逆に押し潰されてしまった

男 B

「バツ…バケモノ!!」

マカロフ

「貴様等はそのバケモノのガキに手エ出したんだ

人間の法律で自分を守るなどと夢々思っなよ!!」

男 B

「ひっ、ひぎっ…」

男 B は完全にビビってしまいガタガタ震えて泣いていた

男 A

「っ…強エ! コイツ等メチャクチャだぜ!!」

マカロフ

「ジョゼー！出て来んかあつ！！」

『チツ！ガジルとエレメント4は何処にいやがる！』

タクトたちが下で戦っている間屋根を支える木の上でガジルは戦いを観戦していた

ガジル

「あれがティターニアのエルザに噂の新人タクト

ギルダーツ、ラクサス、ミストガンは参戦せず…か」

ガジルは戦況を見ながら邪悪な笑みを浮かべていた

ガジル

「しかし、これ程までにマスター・ジョゼの計画通りに事が進むとはな

せいぜい暴れ回れクス共が」

~~~~~

その頃レヴィイたちの看病をしていたルーシイは…

ルーシイ

「はぁー、みんなあたしだけ置いてっちゃんだもんなく」

一人置いていかれた事に不満を漏らしていた

ポツポツポツ

ルーシイ

「やだ…天気雨？」

ルーシイが突然の雨に空を見上げていると通りから見知らぬ人が現れた

???

「しんしん…と

ジュビアは雨女…しんしんと

…貴女は何女？」

ルーシイ

「あの…誰ですか？」

ジユビア

「楽しかったわごきげんよう…しんしんと」

ルーシイ

「えっ！？何なの！？」

ルーシイがいきなり現れてそのまま去って行くこととする女におもわずツツコンでいると

突然目の前の地面が隆起し始めた

???

「ノンノンノン

ノンノンノン

ノンノンノンノンノンノンノン

3・3・7のNOでボンジュール」

ルーシイ

「また変なの出たっ！？」

???

「ジユビア様ダメですなあ仕事放棄は

私の眼鏡が囁いておりますぞそのマドモアゼルこそが愛しの標的だ  
とねえ」

地面から現れた人物はジュビアの知り合いらしく去って行くのを引  
き留めた

ジュビア

「あら…この娘だったの？」

ルーシイ

「えっ？」

????

「申し遅れました私の名前はソル  
ムツシュ・ソルとお呼びください」

ソルは律義にお辞儀するが何故か横向きにした

ソル

「偉大なるファントムよりお迎えにあがりました」

ルーシイ

「ファントム！？じゃあ…アンタたちがレビィちゃんたちを…！」

ソル

「ノンノンノン」

3つのNOで誤解を解きたい

ギルドを壊したのもレヴィイ様たちを襲ったのも全てはガジル様」

ゴポッ！

ルーシイ

「?!?!」

ルーシイがソルの話を聞いていると突然身体が水に包まれた

ルーシイ

「…ぷはっ！な、何コレ!?!」

ジュビア

「ジュビアの水流拘束ウォーターロックは決して破られない」

ルーシイ

「……………」

ルーシイは息が続かなくなり遂に気を失ってしまった

ジュビア

「大丈夫…ジユビアは貴女を殺さない

何故なら貴女を連れて帰る事がジユビアの任務だから  
ルーシイ・ハートフィリア様」

ソル

「んんん！ビクトワール！！」

ジユビア

「捕獲完了」

~~~~~

ルーシイが捕まった頃ファントムでは

『どけ！！邪魔だ！！』

タクトは神速で動きながら奮闘していた

男A

「クソツ！誰なんだアイツは！！」

男C

「あの漆黒の黒髪に黒い羽織り、そしてあの鬼神の如き強さ…

間違いないアイツは最近噂の漆黒の閃光だ！！」

『攻式抜刀術式ノ型 百華』

ブシュツ

タクトが刹那を振るうと周りにいた敵が血を噴き出して倒れていく

マカロフ

「タクト！ここはお前達に任せる

ジヨゼはおそらく最上階に居るはずじゃワシが息の根を止めてくる

！！」

『…了解

ここは俺達で食い止めておく』

マカロフはタクトの言葉を聞くと階段を駆け上がっていった

マスターは行ったか

ガジルやエレメント4が居ないのが気になるがあとはコイツ等を全員黙らせるだけだな

そうタクトが思っていると上から黒い物体が降りてきた

ガジル

「へへっ、一番厄介なのが消えたトコで一暴れしようかね

……ハア……!!」

ガジルは降りてくるなり敵味方関係無く鉄と化した腕を振り下ろした

アルザック

「何だアイツ…自分の仲間までやりやがった」

ガジル

「来いクズ共！鉄のドラゴンスレイヤーガジル様が相手だ!!」

ヒュン

ガジル

「（ピクッ！）」

ガジルは何か風を切る音に反応して咄嗟に鉄の腕でガードした

ガキイン

『ほう、いい反応だな』

その腕を見るにお前が鉄竜のガジルだな』

ガジル

「ああそうだ

そう言うお前は漆黒の閃光だろ？」

『誰がつけたかは知らんがその名で通ってるらしいな』

実はタクトが仕事に行く度に電光石火の速さで動き敵を倒すことからそれを見ていた人達によって口々にその名が広まっていたのだった

ガキイン

二人は軽く後ろに跳んで距離をとった

『ガジルお前に一つ訊きたい事がある  
レビイたちをやったのはお前か?』

事件の現場を見るにガジルがやった事は明白だった

ガジル

「レビイたちだあ？」

あゝ、あの時やった三人組のことか？」

だけど、タクトは本人の口から聞きたかった

ガジル

「ギヒイ、ホント弱かったよアイツ等

あんな奴等が魔導士やってるようじゃフェアリーテイルもたかか知れるな」

何故なら…

『そうか、ならもう躊躇しなくていいな』

ガジル

「あ？何をだよ？」

ガジルはタクトの纏う空気が変わっていくのに気付いていなかった

『貴様をたたつ斬ることをだ！！』

ガジル

「?!?!」

ガジルはタクトから溢れ出す鋭い刃物のような殺気によつやく気が付いた

ガジル

「…ハッ！やってみろ！」

そんな細っこいのでオレが斬れるならな！！」

軽く身震いしながらもガジルにはまだタクトを挑発する余裕があった

ガジル

「鉄竜槍…」

ガジルは右手を槍に変形させて先に間合いを詰めた

ガジル

「鬼薪！！」

嵐のような乱れ突きがタクトに襲いかかっていく

ギイン ギイン

ギイン ガキイン

タクトは受け流すように避けていくが最後の鋭い突き上げに身体を飛ばされてしまった

ガジル

「ギヒィ、どうしたさっきのはハッターリか？」

ガジルは跳び上がり「鉄竜剣！」と言って右手を大剣に変形させると上段から斬り下ろそうと振りかぶった

『……ハッターじゃないさ』

ガジル

「?!?!」

ゾクッ

背中に何とも言い難い悪寒が走る

本能がアラームを鳴らす  
早くコイツから離れろと

『攻式抜刀術壱ノ型 煌』

ヒュン

ガジルは空中で無理矢理体勢を変えて飛び退いた

ガジル

「アブネーアブネー

今のはヤバかったぜ」

『何安心してる』

ブシュッ

ガジル

「?な、に!？」

ガジルは避けたつもりでいたが胸に真一文字に痛みが走る

ガジル

「バカな!?!オレの鱗は鋼鉄で出来ているんだぞ!！」

『驚く程の事でもないだろう

まさか俺が鉄程度斬れないとも思ってたか?』

ガジル  
「グツ!？」

タクトは刹那に付いた血を振って払うとそのままガジルに突き付けた

『言っておくがまだ終わりじゃないぞ』

タクトは刹那を下段に構え腰を落とす

『レビイたちの借りがまだ残ってるからな』

タクトは言うや否やガジルに向かってダッシュした

ガジル  
「クソッ」

バックステップをして距離を保つように飛び退く

『逃がすか!』

ガジル  
「ギヒイ、悪いな

「ここは退かせてもらっせ……鉄竜の咆哮!！」

タクトは逃がすまいと更に加速するがガジルも退きながら咆哮を放ったため回避するので精一杯だった

『チツ、逃げるのかガジル!！』

ガジル

「アンタ想像以上に強いんでなこのままじゃ本当に危険だ

それにここも直に用済みになるしな」

『何?どういうことだ』

タクトがガジルの言葉の真意を訊こうとすると突然横槍が入った

ナツ

「ガジルー!！」

ドゴオ

ドゴオーン

ナツ

「タクト！コイツオレにくれー！」

『ナツ……わかったここはお前に譲ってやるよ』

タクトはナツの乱入のおかげで熱くなっていた頭から熱が引いていった

『その代わり絶対倒せよ』

ナツ

「オウ！」

ナツが元気よく答えると山となっていた瓦礫が吹き飛んだ

ガジル

「ギヒイ、言ってくれるじゃねえか

タクトならともかくお前みたいなクズなパンチしか出来ないヤツじやオレの足元にも及ばねえよ」

ナツ

「安心しろよただの挨拶だ  
竜のケンカの前のな」

ゴゴゴッ

ゴゴゴッ

ナツが今にも踏み出そうとした時突然ギルドが揺れだした

男F

「な、何だ地震か!？」

エルザ

「違うな

これはマスター・マカロフの”怒り”だ

巨人の逆鱗…もはや誰にも止められんぞ」

『ハハツ、凄いなマスターは

おし、俺もやるか』

タクトは刹那を握り直すと敵を斬り捨てながら駆け出した

今俺がやるべき事

今俺に出来る事

それはここに居ないエレメント4を探すこと

そして…

…そして？

何だ…何かを…忘れている…何か大事な事を…

ドンッ

立ち止まってしまったいたタクトの背中に軽い衝撃が走る

エルザ

「どうしたタクト！

動きが止まっているぞ！」

『エルザ…か』

いや、何か大切な事を忘れていている気がしてな』

背中越しにエルザが問い掛けるがタクトは生返事しか返せなかった

ズバアッ

エルザは襲いかかってくる男共を蹴散らしながら再度問いた

エルザ

「大切な事？何だそれは？」

『それを今思い出している

悪いけど少しの間俺の周りの事頼んでいいか？』

エルザ

「わかった

だが、状況が状況だ早めに頼むぞ」

『わかってる』

タクトは熱くなって大切な事を忘れてしまった自分に対して舌打ちしたが、エルザに周りの事を任せた事もありすぐさま頭を切り替え

て記憶を掘り起こした

考える

考える

俺は昨日何を調べた

ファントム…ジョゼ…エレメント4…ガジル…

そして…

『…思い出した  
エルザ!…』

タクトは振り返ってエルザに知らせようとした時ズドンッ、という音と共に上から何か落ちてきた

エルザ

「マ、マスター!？」

マカロフ

「あ…あ…う…あ…

ワ、ワシの…魔力が…」

落ちてきたのは先程上階に上っていったマカロフであった

ナツ

「じっちゃん!」

ガジル

「ちえっ、もうお楽しみは終わりかよ」

エルザ

「マスター!しっかり!!」

グレイ

「どうなってるんだ!!」

マスターから全く魔力を感じねえぞ!!」

『これはエレメント4のエリアの仕業だな

魔力を完全に抜き取られてる』

タクトは資料を思い出してアリアが空魔法の使い手であることから  
当たりをつけた

男E

「よくわからんがチャンスだ！  
フェアリーテイルをぶっ潰せ！！」

ファントムの魔導士達はマカロフが戦闘不能になったのを好機と思  
い動揺しているフェアリーテイルを潰しにかかった

エルザ

「（いかん…戦力だけでなく士気の低下の方が深刻だ！）」

『チツ、エルザ！！』

タクトはすぐさまエルザに声をかける

エルザ

「わかっている！皆の者撤退だー！全員ギルドに戻れー！！」

ナツ

「？なんだと！！」

グレイ

「バカな！！」

エルフマン

「漢は退かんのだー!!」

エルザの言葉によって全員に衝撃が走る

が、すぐ後に「まだやれるぞ!」といういくつも拳がる

エルザ

「マスターなしではジヨゼには勝てん!

撤退するこれは命令だ!!」

ガジル

「あらあらもう帰っちゃうのかい?ギヒヒ」

????

「悲しい…」

スウウウ、と突然ガジルの隣りに大男が現れた

ガジル

「アリア…相変わらず不気味なヤローだ

それで…ルーシィとやらは捕まえたのかい?」

アリア

「全てはマスター・ジヨゼの作戦

彼女は”本部”に幽閉している」

ナツ

「何だと！？クソツ、ガジルーー！！」

ガジル

「いずれ決着をつけようぜサラマンダー」

ナツに一言残すとそのままガジルとアリアは何処かに消えてしまった

ナツ

「ルーシイが捕まった？」

『ルーシイが狙われているのはわかっていたがまさかこれ自体が”オトリ”だったとはな』

タクトが罠に嵌っていたことに気付き舌打ちしているとナツが敵の一人を引き摺りながら走り出した

『ナツ！』

ナツ

「タクト……じっちゃんたちの事任せていいか？」

ナツは振り返らずタクトにだけ聞こえるくらい小さな声で呟いた

『ああ、それは構わない』

「ただ、ルーシィは俺が熱くなったせいで捕まったようなものだから、それをお前に尻拭いさせていいのか?」

ナツ

「何言ってるんだ」

ルーシィが捕まったのはタクトのせいじゃねえよ

「つかレビィたちやられた時に怒らないヤツは仲間じゃねえよ」

「だからタクトは気にしないでいいルーシィはオレが絶対助ける」

『そうか……じゃあお前に任せるぞナツ』

ナツ

「ああ、任せろ」

ナツは力強く答えるとハッピーと一緒にルーシィ奪還に向かった

『俺もナツとの約束守らんな』

タクトはナツとの約束を守る為にエルザの所に向かった

『エルザ！俺がしんがり殿を務める

その間にマスターと皆を連れて全力で退け！』

エルザ

「タクト…だが、この人数を一人で大丈夫か？」

『俺の心配は無用だ

それよりも今はこれ以上怪我人を増やす事無くギルドに戻るのが先決だ』

エルザ

「わかった

では任せるぞタクト

全員ギルドに戻るぞ私に続けー！！』

エルザは先頭に立って皆を外に連れ出した

しかし、まだ一人納得していない者がいた

グレイ

「待てよタクト！まだレヴィたちの仇を取っていないのに退けるかよ  
！！』

『グレイ…頭に来てるのが自分だけだと思っなよ』

グレイ

「?!?!?」

グレイはタクトから溢れ出る自分自分以上の憤怒を肌で感じて頭に昇った血が急速に冷えた

『グレイ…仇を取るチャンスはまだある

だが、マスターが抜けた穴はあまりにも大きい

だから、今は…退け』

タクトのグレイを掴む手が怒りに震える

それに気付いたグレイは自分以上の怒りを抱きながらもそれを抑えて最善の対処をするタクトに言葉が出なかった

グレイ

「ッ!!………わかった

今は…タクトに…従う」

そう言うとグレイはエルザたちの後を追って出て行った

『俺も…行くか』

タクトも一つ深呼吸をしてから外に出ようとすると出口辺りで追っ手に追いつかれた

男G

「ヒヤハハ、待てよ逃げんじゃねーよ!」

男E

「お前達はここで全滅するんだよ!」

『悪いな』

殿を務める以上ここから先は誰も行かせるわけにはいかない

換装 朱雀』

タクトが追っ手に向き直ると刹那と入れ替わり右手に紅羽刀朱雀が握られていた

『炎上壁!』

タクトが朱雀を地面に突き立てると幾つもの火柱が上がり、壁となつて行く手を塞いだ

男共

「「「ギヤアアアッ!」「」」

『これで暫くは追って来れないだろう』

タクトは朱雀を引き抜くとみんなの後を追うようにギルドに帰って  
いった

第六魔法：ファントムロード（前半）（後書き）

スイマセン時間かけたわりに内容薄くてm（　　）m

しかもまだ続くというね

はい、スイマセン

書いてたら長くなったんで途中で切りました

正直次の話の方がメインなので次の話も読んで頂けると嬉しいです

あともう一つ

小説の書き方がちよいちよいと変わってて読者には迷惑掛けてるかも知れませんがご容赦下さい

何分まだ未熟者なので手探り状態です

少しでも読みやすくなるように努力します

では、ここまで読んでくださり有り難うございました

次話もお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7970p/>

---

闇を切り裂く黑白の魔導士

2011年10月4日09時41分発行